

Sanshirō Chapter 3 (Natsume Sōseki)

がくねん くがつじゅういちにち はじ さんしろう しょうじき ごぜんじゅうじはん がっこう い
学年は九月十一日に始まった。三四郎は正直に午前十時半ごろ学校へ行って見たが、
げんかんまえ けいじばん こうぎ じかんわ がくせい ひとり じぶん き ぶん
玄関前の掲示場に講義の時間割りがあつたばかりで学生は一人もいない。自分の聞くべき分だ
けを手帳に書きとめて、それから事務室へ寄つたら、さすがに事務員だけは出ていた。講義は
いつから始まりますかと聞くと、九月十一日から始まると言っている。すましたものである。
でも、どの部屋を見ても講義がないようですがと尋ねると、それは先生がいなからだと答
えた。三四郎はなるほどと思つて事務室を出た。裏へ回つて、大きな櫓の下から高い空をの
ぞいたら、普通の空よりも明らかに見えた。熊笹の中を水ぎわへおりて、例の椎の木のところ
まで来て、またしゃがんだ。あの女がもう一ぺん通ればいらいに考へて、たびたび丘
の上をながめたが、丘の上には人影もしなかつた。三四郎はそれが当然だと考へた。けれど
もやはりしゃがんでいた。すると、午砲が鳴つたんで驚いて下宿へ歸つた。

よくじつ しょうはちじ せいもん おおどお さゆう う
翌日は正八時に学校へ行つた。正門をはいると、とつつきの大通りの左右に植えてある
いちよう なみき め む ほう つ ざか さ
銀杏の並木が目についた。銀杏が向こうの方で尽きるあたりから、だらだら坂に下がつて、正
門のきわに立つた三四郎から見ると、坂の向こうにある理科大学は二階の一部しか出ていな
い。その屋根のうしろにあさひのうえのもりとおかがや ひ しょうめん
やね あさひ う えの もり とお かがや ひ しょうめん
い。その屋根のうしろに朝日を受けた上野の森が遠く輝いている。日は正面にある。三四
郎はこの奥行のある景色を愉快に感じた。

いちよう なみき がわ つ みぎて ほうぶんかだいがく ひだりて すこ はくぶつ
銀杏の並木がこちら側で尽きる右手には法文科大学がある。左手には少しさがつて博物の
きょうしつ けんちく そうぼう おな ほそなが まど うえ さんかく やね つ だし
教室がある。建築は双方ともに同じで、細長い窓の上に、三角にとがつた屋根が突き出し
ている。その三角の縁に当る赤煉瓦と黒い屋根のつぎめの所が細い石の直線できている
る。そうしてその石の色が少し青味を帯びて、すぐ下にくるはでな赤煉瓦に一種の趣を添
えている。そうしてこの長い窓と、高い三角が横にいくつもつづいている。三四郎はこのあいだ
のみやくん せつ き いらい きゅう たてもの おも
野々宮君の説を聞いてから以来、急にこの建物をありがたく思つていたが、けさは、この
いけん しょて じぶん とくせつ き
意見が野々宮君の意見でなくつて、初手から自分の持説であるような気がした。ことに博
物室が法文科と一直線に並んでいないで、少し奥へ引つ込んでいるところが不規則で妙だ
と思つた。こんど野々宮君にあつたら自分の發明としてこの説を持ち出そうと考へた。

法文科の右のはずれから半町ほど前へ突き出している図書館にも感服した。よくわからないがなんでも同じ建築だろうと考えられる。その赤い壁につけて、大きな棕櫚の木を五、六本植えたところが大いにいい。左手のずっと奥にある工科大学は封建時代の西洋のお城から割り出したように見えた。まっ四角にできあがっている。窓も四角である。ただ四すみと入口が丸い。これは櫓を形取ったんだらう。お城だけにしっかりしている。法文科みたように倒れそうでない。なんだか背の低い相撲取りに似ている。

三四郎は見渡すかぎり見渡して、このほかにもまだ目に入らない建物がたくさんあることを勘定に入れて、どことなく雄大な感じを起こした。「学問の府はこうなくてはならない。こういう構えがあればこそ研究もできる。えらいものだ」——三四郎は大学者になったような心持ちがした。

けれども教室へはいつてみたら、鐘は鳴っても先生は来なかった。その代り学生も出て来ない。次の時間もそのとおりであった。三四郎は癩癩を起こして教場を出た。そうして念のために池の周囲を二へんばかり回って下宿へ帰った。

それから約十日ばかりたってから、ようやく講義が始まった。三四郎がはじめて教室へはいつて、ほかの学生といっしょに先生の来るのを待っていた時の心持ちはじつに殊勝なものであった。神主が装束を着けて、これから祭典でも行なおうとするまぎわには、こういう気分がするだろうと、三四郎は自分で自分の見を推定した。じっさい学問の威厳に打たれたに違いない。そのみならず、先生がベルが鳴って十五分立っても出て来ないのでますます予期から生ずる敬畏の念を増した。そのうち人品のいいおじいさんの西洋人が戸をあけてはいつてきて、流暢な英語で講義を始めた。三四郎はその時 answer という字はアングロ・サクソン語の and-swaru から出たんだということを覚えた。それからスコットの通った小学校の村の名を覚えた。いずれも大切に筆記帳にしるしておいた。その次には文学論の講義に出た。この先生は教室にはいつて、ちょっと黒板をながめていたが、黒板の上を書いてある Geschehen という字と Nachbild という字を見て、はあドイツ語かと言って、笑いながらさっさと消してしまった。三四郎はこれがためにドイツ語に対する敬意を少し失ったように感じた。先生は、それから古来文学者が文学に対して下した定義をおよそ二十ばかり並べた。三四郎はこれも大事に手帳に筆記しておいた。午後は大教室に出た。その教室には約七、

はちじゅうにん ちょうこうしゃ えんぜつくちょう ほうせい いっぱつうらが ゆめ
八十人ほどの聴講者がいた。したがって先生も演説口調であった。砲声一発浦賀の夢を
やぶ ぼうとう
破ってという冒頭あったから、三四郎はおもしろがって聞いていると、しまいにはドイツの
てつがくしゃ
哲学者の名がたくさん出てきてはなはだ解しにくくなった。机の上を見ると、落第という字
ほ ひま まか し あ かた かし いた き
がみごとに彫ってある。よほど暇に任せて仕上げたものとみえて、堅い檜の板をきれいに切
こ しろうと おも しんこく となり おとこ かんしん こんき
り込んだでぎわは素人とは思われない。深刻のできである。隣の男は感心に根気よく筆記
とお にお
をつづけている。のぞいて見ると筆記ではない。遠くから先生の似顔をポンチにかいていたの
ほう だ え
である。三四郎がのぞくやいなや隣の男はノートを三四郎の方に出して見せた。絵はうまくで
ひさかた くもい そら ほととぎす
きているが、そばに久方の雲井の空の子規と書いてあるのは、なんのことだか判じかねた。

こうぎ おわ さんしろう ひろう きみ にかい まど ほぶづえ つ
講義が終わってから、三四郎はなんとなく疲労したような気味で、二階の窓から頬杖を突いて、
せいもんない にわ み おお まつ さくら う じゃり し ひろ
正門内の庭を見おろしていた。ただ大きな松や桜を植えてそのあいだに砂利を敷いた広い
みち て い こころも ののみやくん
道をつけたばかりであるが、手を入れすぎているだけに、見ていて心持ちがいい。野々宮君
はなし むかし せんせい ひと
の話によるとここは昔はこうきれいではなかった。野々宮君の先生のなんとかいう人が、
がくせい じぶんうま の の まわ き いじ わる
学生の時分馬に乗って、ここを乗り回すうち、馬がいうことを聞かないで、意地を悪くわざ
き した とお ぼうし えだ ひ げた は あぶみ
と木の下を通るので、帽子が松の枝に引っかかる。下駄の歯が鏡にはさまる。先生はたいへ
こま まえ きたどこ かみゆいどこ しょくにん で
ん困っていると、正門前の喜多床という髪結床の職人がおおぜい出てきて、おもしろがって
わら ゆうし もの きょきん こうない うまや さんとう
笑っていたそうである。その時分には有志の者が醸金して構内に厩をこしらえて、三頭の
馬と、馬の先生とを飼っておいた。ところが先生がたいへんな酒飲みで、とうとう三頭のうち
のいちばんいいしろ う の さんせいじだい ろうば
のいちばんいい白い馬を売って飲んでしまった。それはナポレオン三世時代の老馬であったそ
うだ。まさかナポレオン三世時代でもなかろう。しかしのん気な時代もあったものだと考
え おとこ き
えていると、さっきポンチ絵をかいた男が来て、

だいがく へんじ
「大学の講義はつまらんなあ」と言った。三四郎はいいかげんな返事をした。じつはつまるか
つまらないか、三四郎にはちっとも判断ができないのである。しかしこの時からこの男と口を
きく よう になつた。

ひ き うっ いけ まわり まわ み あ
その日はなんとなく気が鬱して、おもしろくなかったので、池の周囲を回るのは見合わせて
うち かえ ばんしょくごびつき く かえ よ ゆかい ふゆかい
家へ帰った。晩食後筆記を繰返して読んでみたが、べつに愉快にも不愉快にもならなかつ
た。母に言文一致の手紙を書いた。――学校は始まった。これから毎日出る。学校はたいへ
ひろ ばしょ たてもの うつく なか さんぼ たの
ん広いい場所で、建物もたいへん美しい。まん中に池がある。池の周囲を散歩するのが楽
でんしゃ ちか の な なにか
しみだ。電車には近ごろようやく乗り馴れた。何か買ってあげたいが、何がいいかわからない

から、買ってあげない。ほしければそっちから言ってきてくれ。今年ことしの米こめはいまに価ねが出るから、売うらずにおくほうとくが得とくだろう。三輪田みわたのお光みつさんにはあまり愛想あいそよくしないほうがよかるう。東京とうきょうへ来てみると人ひとはいくらでもいる。男おとこも多いが女おんなも多い。というような事ことをごたごたなら並べたものであった。

手紙てがみを書いて、英語えいごの本ほんを六、七ページろく しち読んだらいやになった。こんな本ほんを一冊いっさつぐらい読んでもだめだと思おもいだした。床とこを取とって寝ねることにしたが、寝ねつかれない。不眠症ふみんしょうになったらはやく病びょういん院いんに行いって見みてもらおうなどと考かんがえているうちに寝ねてしまった。

あくる日も例刻れいこくに学校がっこうへ行いって講義こうぎを聞きいた。講義こうぎのあいだに今年ことしの卒業生そつぎょうせいがどこそこへいくらで売うれたという話はなしを耳みみにした。だれとだれがまだ残のこっていて、それがあある官立学校かんりつがっこうの地位ちいを競争きょうそうしている噂うわさだなどと話ものしている者ものがあった。三四郎さんしろうは漠然ぼくぜんと、未来みらいが遠くから眼がん前に押し寄おしせるようにぶい圧迫あつぱくを感じかんじたが、それはすぐ忘わすれてしまった。むしろ昇之助しょうのすけがなんとかしたというほうの話はなしがおもしろかった。そこで廊下ろうかで熊本出くまもとでの同級生どうきゅうせいをつかまえて、昇之助しょうのすけとはなんだと聞きいたら、寄席よせへ出でる娘義太夫むすめぎだゆうだと教おしえてくれた。それから寄席よせの看板かんばんはこんなもので、本郷ほんごうのどこにあるということまで言いって聞きかせたうえ、今度こんどの土曜どようにいっしょに行いこうと誘さそってくれた。よく知しってると思おもったら、この男おとこはゆうべはじめて、寄席よせへ、はいったのだそう。三四郎さんしろうはなんだか寄席よせへ行いって昇之助しょうのすけが見みたくなかった。

昼飯ひるめしを食くいに下宿げしゆくへ帰かえろうと思おもったら、きのうポンチ絵えをかいた男おとこが来て、おいおいと言いいながら、本郷ほんごうの通りとどみけんの淀見軒とどみけんという所ところに引ひ張ばって行いって、ライスカレーを食くわした。淀見軒とどみけんという所ところは店みせで果物くだものを売うっている。新あたらしい普請ふしんであった。ポンチ絵えをかいた男おとこはこの建築けんちくの表おもてを指ゆびさして、これがヌーボー式しきだと教しえた。三四郎さんしろうは建築けんちくにもヌーボー式しきがあるものとはじめて悟さとった。帰り道かえに青木堂あおきどうも教おそわった。やはり大学生だいがくせいのよく行く所ところだそうである。赤門あかもんをはいって、二人ふたりで池いけの周まわりを散歩さんぽした。その時ときポンチ絵えの男おとこは、死しんだ小泉八雲先生こいずみやくもせんせいは教員きょういん控室ひかえしつへはいるのがきらいで講義こうぎがすむといつでもこの周まわ圍いをぐるぐる回まわって歩あいたんだと、あたかも小泉先生こいずみせんせいに教おそわったようなことを言いった。なぜ控室ひかえしつへはいらなかつたのだろうかと三四郎さんしろうが尋たずねたら、

「そりゃあたりまえださ。第一だいいち彼らかれらの講義こうぎを聞きいてもわかるじゃないか。話はなしせるものは一人ひとりもいやしない」と手てひどいことを平氣へいきで言いったには三四郎さんしろうも驚おどろいた。この男おとこは佐々木与次郎ささきよじろうとい

って、^{せんもんがっこう そつぎょう}専門学校を卒業して、^{せんか}今年また選科へはいったのだそうだ。^{ひがしかたまち ごばんち ひろた}東片町の五番地の広田
という家^{うち}にいるから、^{あそ}遊びに^こ来いと言う。下宿^{こうとうがっこう}かと聞くと、^{こた}なに高等学校の先生の家だと答
えた。

それから^{とうぶん}当分のあいだ^{さんしろう まいにちがっこう かよ}三四郎は毎日学校へ通って、^{りちぎ こうぎ き}律義に講義を聞いた。^{ひっしゅうかもく}必修課目以外の
ものへも^{ときどきしゅっせき}時々出席してみた。それでも、^たまだもの足りない。そこで^{せんこうかもく}ついには専攻課目にまる
で^{えんこ}縁故のないものまでへも^{かお}おりおりは顔を出した。しかし^だしたいは^{にど}二度か^{さんど}三度でやめてしま
った。^{いっ}一か^{げつ}月と^{つづ}続いたのは^{すこ}少しもなかった。それでも^{へいきんいっしゅう やくよんじゅうじかん}平均一週に約四十時間ほどにな
る。いかな^{きんべん}勤勉な三四郎にも^{おお}四十時間はちと^{いっしゅう あっばく かん}多すぎる。三四郎はたえず一種の圧迫を感じて
いた。しかるにもの足りない。三四郎は^{たの}楽しまなくなった。

ある日^{ひ ささきよじろう あ}佐々木与次郎に会ってその^{はなし}話をすると、^{め まる}与次郎は四十時間と聞いて、目を丸くして、
「ばかばか」と言ったが、^{げしゆくや めし いちにち じゅっ く}「下宿屋のまずい飯を一日に十ぺん食ったらもの足りるようにな
るか^{かんが}考えてみろ」といきなり^{けいく}警句でもって三四郎をどやしつけた。三四郎はすぐさま^{おそ}恐れ入
って、「^{そうだん}どうしたらよかろう」と相談をかけた。

「^{でんしゃ の}電車に乗るがいい」と与次郎が言った。三四郎は^{なに}何か^{ぐうい}寓意でもあることと思^{おも}って、しばらく
考えてみたが、べつにこれという^{しあん う}思案も浮かばないので、

「^{ほんとう}本当の電車か」と聞き直した。その時^{とき}与次郎はげらげら^{わら}笑って、

「電車に乗って、^{とうきょう じゅうご ろっ の まわ}東京を十五、六ぺん乗り回しているうちにはおのずからもの足りるようにな
るさ」と言う。

「なぜ」

「なぜって、^いそう、^{あたま}生きてる頭を、^し死んだ講義で^{ふう こ}封じ込めちゃ、^{たす}助からない。外へ^{そと}出て^で風を
^い入れるさ。その上にも^{うえ}もの足りる工夫は^{くふう}いくらでもあるが、まあ電車^{いちばん}が一番の^{しょほ}初歩でかつもつと
も^{けいべん}軽便だ」

その日の夕方、^{ひ ゆうがた}与次郎は^{よじろう}三四郎を^{さんしろう}拉して、^{らっ}四丁目^{よんちょうめ}から^{でんしゃ}電車に乗って、^の新橋^{しんばし}へ行って、^い新橋か
ら^ひまた^{かえ}引き返して、^{にほんばし}日本橋へ来て、^きそこで^お降りて、

「どうだ」と聞いた。

つぎ おおどお ほそ よちよう ま ひら や かんばん りょうりや あ ばんめし
次に大通りから細い横町へ曲がって、平の家という看板のある料理屋へ上がって、晩飯を
く さげ の げじよ きょうとべん つか てんめん おもて で
食って酒を飲んだ。その下女はみんな京都弁を使う。はなはだ纏綿している。表へ出た
与次郎は赤い顔をして、また

「どうだ」と聞いた。

ほんば よせ つ い い きはらだな
次に本場の寄席へ連れて行ってやると言っ、また細い横町へは行って、木原店という寄席を
上がった。ここで小さんという落語家を聞いた。十時過ぎ通りへ出た与次郎は、また

「どうだ」と聞いた。

ものた こた た こころも
三四郎は物足りたとは答えなかった。しかしまんざらもの足りない心持ちもしなかった。する
とおお ろん はじ
と与次郎は大いに小さん論を始めた。

てんさい げいじゆつか おも
小さんは天才である。あんな芸術家はめったに出るものじゃない。いつでも聞けると思うか
やす かん き どく くれ とき おな い われわれ
ら安っぽい感じがして、はなはだ気の毒だ。じつは彼と時を同じゅうして生きている我々は
たいへんなしあわせである。いま すこ う 生まれても小さんは聞けない。少しおくれても
どうよう えんゆう おもむき ちが たいこもち
同様だ。――円遊もうまい。しかし小さんとは趣が違っている。円遊のふんした太鼓持
は、太鼓持になった円遊だからおもしろいので、小さんのやる太鼓持は、小さんを離れた太鼓
持だからおもしろい。円遊の演ずる人物から円遊を隠せば、人物がまるで消滅してしまう。
えん じんぶつ かく しょうめつ
小さんの演ずる人物から、いくら小さんを隠したって、人物は活発溼地に躍動するばかりだ。
かっぱつはっち やくどう
そこがえらい。

与次郎はこんなことを言っ、また

「どうだ」と聞いた。じつ 実をいうと三四郎には小さんの味わいがよくわからなかった。そのうえ
あじ
円遊なるものはいまだかつて聞いたことがない。したがって与次郎の説の当否は判定しにく
せつ とうひ ほんてい
い。しかしその比較のほとんど文学的といいうるほどに要領を得たには感服した。
ひかく ぶんがくてき ようりょう え かんぶく

こうとうがっこう まえ わか
高等学校の前で別れる時、三四郎は、

「ありがとう、大いにもの足りた」と礼を述べた。すると与次郎は、

「これからさきは図書館でなくっちゃもの足りない」と言って片町の方へ曲がってしまった。
この一言で三四郎ははじめて図書館にはいることを知った。

その翌日から三四郎は四十時間の講義をほとんど半分に減らしてしまった。そして図書館にはいった。広く、長く、天井が高く、左右に窓のたくさんある建物であった。書庫は入口しか見えない。こっちの正面からのぞくと奥には、書物がいくらかでも備えつけてあるように思われる。立って見ていると、書庫の中から、厚い本を二、三冊かかえて、出口へ来て左へ折れて行く者がある。職員閲覧室へ行く人である。なかには必要の本を書棚からとりおろして、胸いっぱいひろげて、立ちながら調べている人もある。三四郎はうらやましくなった。奥まで行って二階へ上がって、それから三階へ上がって、本郷より高い所で、生きたものを近づけず、紙のにおいをかぎながら、――読んでみたい。けれども何を読むかにいたっては、べつにはっきりした考えがない。読んでみなければわからないが、何かあの奥にたくさんありそうに思う。

三四郎は一年生だから書庫へはいる権利がない。しかたなしに、大きな箱入りの札目録を、ご自分で一枚一枚調べてゆくと、いくらめくってもあとから新しい本の名が出てくる。しまいに肩が痛くなった。顔を上げて、中休みに、館内を見回すと、さすがに図書館だけあって静かなものである。しかも人がたくさんいる。そうして向こうのはずれにいる人の頭が黒く見える。目口ははっきりしない。高い窓の外から所々に木が見える。空も少し見える。遠くから町の音がする。三四郎は立ちながら、学者の生活は静かで深いものだと考えた。それでその日はそのまま帰った。

次の日は空想をやめて、はいるとさっそく本を借りた。しかし借りそくなかったので、すぐ返した。あとから借りた本はむずかしすぎて読めなかったからまた返した。三四郎はこういうふうにして毎日本を八、九冊ずつは必ず借りた。もつともたまにはすこし読んだのもある。三四郎が驚いたのは、どんな本を借りても、きつとだれか一度は目を通してという事実をはっけんしたときであった。それは書中ここかしこに見える鉛筆のあとでたしかである。ある時三四郎は念のため、アフラ・ベーンという作家の小説を借りてみた。あけるまでは、よもやと思ったが、見るとやはり鉛筆で丁寧にするしがつけてあった。この時三四郎はこれはどうていやりきれないと思った。ところへ窓の外を楽隊が通ったんで、つい散歩に出る気になって、通りへ出て、とうとう青木堂へはいった。

はいってみると客が二組あって、いずれも学生であったが、向こうのすみにたった一人離れて茶を飲んでいて男がある。三四郎がふとその横顔を見ると、どうも上京の節汽車の中で水蜜桃をたくさん食べた人のようである。向こうは気がつかない。茶を一口飲んで煙草を一吸いすって、たいへんゆっくり構えている。きょうは白地の浴衣をやめて、背広を着ている。しかしけっしてりっぱなものじゃない。光線の圧力の野々宮君より白シャツだけがましくなくらいなものである。三四郎は様子を見ているうちにたしかに水蜜桃だと物色した。大学の講義を聞いてから以来、汽車の中でこの男の話したことがなんだか急に意義のあるように思われたところなので、三四郎はそばへ行って挨拶をしようかと思った。けれども先方は正面を見たなり、茶を飲んで煙草をふかし、煙草をふかしては茶を飲んでいる。手の出し方がない。

三四郎はじっとその横顔をながめていたが、突然コップにある葡萄酒を飲み干して、表へ飛び出した。そうして図書館に帰った。

その日は葡萄酒の景気と、一種の精神作用とで、例になくおもしろい勉強ができたので、三四郎は大いにうれしく思った。二時間ほど読書三昧に入ったのち、ようやく気がついて、そろそろ帰るしたくをしながら、いっしょに借りた書物のうち、まだあけてみなかった最後の一冊を何気なく引っぺがしてみると、本の見返しのあいた所に、乱暴にも、鉛筆でいっばい何か書いてある。

「ヘーゲルのベルリン大学に哲学を講じたるとき、ヘーゲルに毫も哲学を売るの意なし。彼の講義は真を説く講義にあらず、真を体せる人の講義なり。舌の講義にあらず、心の講義なり。真と人と合して醇化一致せる時、その説くところ、言うところは、講義のための講義にあらずして、道のための講義となる。哲学の講義はここに至ってはじめて聞くべし。いたずらに真を舌頭に転ずるものは、死したる墨をもって、死したる紙の上に、むなしき筆記を残すにすぎず。なんの意義かこれあらん。……余今試験のため、すなわちパンのために、恨みをのみ涙をのんでこの書を読む。岑々たる頭をおさえて未来永劫に試験制度を呪詛することを記憶せよ」

とある。署名はむろんない。三四郎は覚え^{おぼ}ず微笑^{びしょ}した。けれどもどこか啓発^{けいはつ}されたような気がした。哲学ばかりじゃない、文学もこのとおりで^{ぶんがく}ろうと考^{かんが}えながら、ページをはぐると、まだある。「ヘーゲルの……」よほどヘーゲルの好き^すな男^{おとこ}とみえる。

「ヘーゲルの講義^{こうぎ}を聞^きかんとして、四方よりベルリンに集^{あつ}まれる学生^{がくせい}は、この講義^{こうぎ}を衣食^{いしょく}の資^しに利用^{りよう}せんと野^や心^{しん}をもつて集^{あつ}まれるにあらず。ただ哲人^{てつじん}ヘーゲルなるものありて、講壇^{こうだん}の上^うに、無^む上^{じょう}普^ふ遍^{へん}の真^{しん}を伝^{つた}うると聞^きいて、向^{こう}上^{じょう}求^ぐ道^{どう}の念^{ねん}に切^{せつ}なるがため、壇下^{だんか}に、わが不^ふ穩^{おん}底^{てい}の疑^ぎ義^ぎを解^{かい}釈^{しゃく}せんと欲^{よく}したる清^{しょう}淨^{じょう}心^{しん}の発^{はつ}現^{げん}にほかならず。このゆえに彼^{かれ}らはヘーゲルを聞^きいて、彼^{かれ}らの未^み来^{らい}を決^{けつ}定^{じょう}しえたり。自^じ己^この運^{うん}命^{めい}を改^{かい}造^{ぞう}しえたり。のっぺらぼうに講義^{こうぎ}を聞^きいて、のっぺらぼうに卒^{そつ}業^{ぎょう}し去^さる公^{こう}ら日^{にっ}本^{ぽん}の大^{だい}学^{がく}生^{せい}と同^{おな}じ事^{こと}と思^{おも}うは、天^{てん}下^かの己^{おの}惚^ぼれなり。公^{こう}らはタイ^{たい}プ・ライ^{らい}ターにすぎず。しかも欲^{よく}張^{ばう}ったるタイ^{たい}プ・ライ^{らい}ターなり。公^{こう}らのなすところ、思^しうところ、言^いうところ、ついに切^{せつ}実^{じつ}なる社^{しゃ}会^{かい}の活^{かつ}気^き運^{うん}に關^{かん}せず。死^しに至^{いた}るまでのっぺらぼうなるかな。死^しに至^{いた}るまでのっぺらぼうなるかな」

と、のっぺらぼうを二^にへん繰^くり返^{かえ}している。三四郎は默^{もく}然^{ぜん}として考^{かんが}え込^こんでいた。すると、うしろからちよいと肩^{かた}をたたいた者^{もの}がある。例^{れい}の与^よ次^じ郎^{らう}であつた。与^よ次^じ郎^{らう}を図^と書^{しょ}館^{かん}で見^みかけるのは珍^{めづ}らしい。彼^{かれ}は講義^{こうぎ}はだめだが、図^と書^{しょ}館^{かん}は大^{たい}切^{せつ}だと主^{しゅ}張^{ちやう}する男^{おとこ}である。けれども主^{しゅ}張^{ちやう}どおりにはい^{すく}ることも少^{すく}ない男^{おとこ}である。

「おい、野^の々^{のみ}宮^や宗^{そう}八^{はち}さんが、君^{きみ}を搜^{さが}していた」と言う。与^よ次^じ郎^{らう}が野^の々^{のみ}宮^や君^{くん}を知^しろうとは思^しいがけなかつたから、念^{ねん}のため理^り科^か大^{だい}学^{がく}の野^の々^{のみ}宮^やさんか^かと聞^きき直^{なお}すと、うんという答^{こた}えを得^えた。さっそく本^{ほん}を置^おいて入^いり口^{ぐち}の新^{しん}聞^{ぶん}を閱^{えつ}覧^{らん}する所^{ところ}まで出^でて行^いつたが、野^の々^{のみ}宮^や君^{くん}がいない。玄^{げん}関^{かん}まで出^でてみたがやっぱりいない。石^{いし}段^{だん}を降^おりて、首^{くび}を延^のばしてそ^{へん}の辺^{みまわ}を見^み回^{まわ}したが影^{かげ}も形^{かたち}も見^みえない。やむを得^えず引^ひき返^{かえ}した。もとの席^{せき}へ来^きてみると、与^よ次^じ郎^{らう}が、例^{れい}のヘーゲル論^{ろん}をさして、小^{ちい}さな声^{こえ}で、

「だいぶ振^{ふる}ってる。昔^{むかし}の卒^{そつ}業^{ぎょう}生^{せい}に違^{ちが}いない。昔^{むかし}のやつは乱^{らん}暴^{ぼう}だが、どこかおもしろいところがある。実^{じつ}際^{さい}このとおりで」とにやにやしている。だいぶ気^きに入^いつたらしい。三四郎は

「野^の々^{のみ}宮^やさんはおらんぜ」と言う。

「さっき入口^{いりぐち}にいたがな」

なに よう
「何か用があるようだったか」

「あるようでもあった」

ふたり としょかん で ときよじろう はな ののみやくん じぶん きぐう
二人はいっしょに図書館を出た。その時与次郎が話した。——野々宮君は自分の寄寓している
ひろたせんせい でし く がくもんず けんきゅう
広田先生の、もとの弟子でよく来る。たいへんな学問好きで、研究もだいぶある。その道の
ひと せいようじん な し
人なら、西洋人でもみんな野々宮君の名を知っている。

さんしろく わかしせいもんない うま くる おも だ
三四郎はまた、野々宮君の先生で、昔正門内で馬に苦しめられた人の話を思い出して、ある
いはそれが広田先生ではなかろうかと かんが こと
考えだした。与次郎にその事を話すと、与次郎は、こ
とによると、うちの先生だ、そんなことをやりかねない人だと言って笑っていた。

よくじつ にちよう がっこう あ
その翌日はちょうど日曜なので、学校では野々宮君に会うわけにゆかない。しかしきのう自
さが き しんたく ほうもん
分を捜していたことが気になりになる。さいわいまだ新宅を訪問したことがないから、こっ
ちから行っ て 用事を聞いてきようという気になった。

おも た あさ しんぶん よ ひる ひる た
思い立ったのは朝であったが、新聞を読んでぐずぐずしているうちに昼になる。昼飯を食べ
たから、出かけようとすると ひさ くまもとで ゆうじん かえ
久しぶりに熊本出の友人が来る。ようやくそれを帰したのはか
れこれ四時過ぎである。ちとおそくなつたが、よてい
予定のとおり出た。

いへ とお し ごにちまえおおくぼ こ でんしゃ りよう い
野々宮の家はすこぶる遠い。四、五日前大久保へ越した。しかし電車を利用すれば、すぐに行
かれる。なんでも ステーション きんべん き ふべん じつ
か 平野家行き以来とんだ失敗をしているから、捜すに不便はない。実をいうと三四郎は
ひらのや ゆ いらい しっぱい かんた こうとうしょうぎょうがっこう ほんごう
かの平野家行き以来とんだ失敗をしている。神田の高等商業学校へ行くつもりで、本郷
よんちょうめ の の こ くだん いいだばし も
四丁目から乗ったところが、乗り越して九段まで来て、ついでに飯田橋まで持ってゆかれて、
そこでようやく 外濠線へ乗り換えて、御茶の水から、神田橋へ出て、まだ悟らずに鎌倉河岸
すきやばし ほう む いそ
を数寄屋橋の方へ向いて急いで行ったことがある。それより以来電車はとかくぶっそうな感じ
がしてならないのだが、こうぶせん ひとすじ あんしん
甲武線は一筋だと、かねて聞いているから安心して乗った。

おおくぼ ステーション お なかひやくにん とお とやまがっこう ほう い ふみきり よこ お
大久保の停車場を降りて、仲百人の通りを戸山学校の方へ行かずに、踏切からすぐ横へ折
れると、ほとんど さんしゃく ほそ みち つまさきあ
三尺ばかりの細い道になる。それを爪先上がりにだらだらと上がると、ま
ばらな もうそうやぶ てまえ さき いっけん ひと す ののみや いへ
ばらな孟宗藪がある。その藪の手前と先に一軒ずつ人が住んでいる。野々宮の家はその手前
ぶん ちい もん む かんけい い ち すじ た
の分であった。小さな門が道の向きにまるで関係のないような位置に筋かいに立っていた。

はいると、家がまた見当違いの所^{けんとうちが ところ}にあった。門も入口もまったくあとからつけたものらしい。

台所^{だいどころ}のわきにりっぱな生垣^{いけがき}があって、庭^{にわ}の方にはかえって仕切り^{しき}もなんにもない。ただ大きな萩^{はぎ}が人の背より高く延びて、座敷^{ざしき}の椽側^{えんがわ}を少し隠^{かく}しているばかりである。野々宮君^くはこの椽側^{いすもだ}に椅子^{いす}を持ち出して、それへ腰^{こし}を掛けて西洋^{せいよう}の雑誌^{ざっし}を読^よんでいた。三四郎^{さんしろう}のはいって来たの^みを見て、

「こっちへ」とい^いった。まるで理科大学^{りかだいがく}の穴倉^{あなぐら}の中^{なか}と同じ挨拶^{あいさつ}である。庭からはいるべきのか、玄関^{げんかん}から回^{まわ}るべきのか、三四郎^{さんしろう}は少しく躊躇^{ちゆうちょ}していた。するとまた

「こっちへ」と催促^{さいそく}するので、思い切^{おも}って庭^きから上がることにした。座敷^{ざしき}はすなわち書齋^{しょさい}で、広^{ひろ}さは八畳^{はちじょう}で、わりあいに西洋^{しよまつ}の書物^{いす}がたくさんある。野々宮君^くは椅子^{いす}を離^{はな}れてすわった。三四郎^{さんせい}は閑静^{かんせい}な所^{ところ}だとか、わりあいに御茶^{おちゃ}の水^{みづ}まで早^{はや}く出^でられるとか、望遠鏡^{ぼうえんきょう}の試験^{しけん}はどうなりましたとか、――締まり^しのない当座^{とうざ}の話^{はなし}をやったあと、

「きのう私^{わたし}を捜^{さが}しておいでだったそうですが、何か御用^{なに ごよう}ですか」と聞^きいた。すると野々宮君^くは、少し気^きの毒^{どく}そう^{かお}な顔^{かほ}をして、

「なにじつはなんでもありませんよ」と言^いった。三四郎^{さんしろう}はただ「はあ」と言^いった。

「それでわざわざ来^きてくれたんですか」

「なに、そういうわけでもありません」

「じつはお国^{くに}のおっかさんがね、せがれがいろいろお世話^{せわ}になるからと言^いって、結構^{けっこう}なものを送^{おく}ってくださったから、ちょっとあなたにもお礼^{れい}を言^いおうと思^{おも}って……」

「はあ、そうですか。何か送^{なに}ってきましたか」

「ええ赤^{あか}い魚^{さかな}の粕漬^{かすづけ}なんですがね」

「じゃひめいちでしょう」

さんしろう
三四郎はつまらんものを送ったものだと思った。しかし野々宮君ののみやくんはかのひめいちについている
いろな事ことを質問しつもんした。三四郎は特に食とくう時くの心得ときを説明こころえした。粕せつめいごと焼かいて、いざ皿やへう
つすという時に、粕とを取とらないと味あじが抜ぬけると言おしって教おしえてやった。

ふたり
二人がひめいちについて問もん答どうをしているうちに、日ひが暮くれた。三四郎はもう帰かえろうと思おもって
挨拶あいさつをしかけるところへ、どこからか電報でんぽうが来きた。野々宮君は封ふうを切きって、電報でんぽうを読よんだ
が、口くちのうちで、「困こまったな」と言いった。

三四郎はすましているわけにもゆかず、といてむやみに立たち入いった事ことを聞きく気きにもならな
かったので、ただ、

「何かできましたか」と棒ぼうのように聞きいた。すると野々宮君は、

「なにかいたしたことでもないのです」と言いって、手てに持もった電報でんぽうを、三四郎に見みせてくれた。
すぐ来きてくれとある。

「どこかへおいでになるのですか」

「ええ、妹いもうとがこのあいだから病びょう気きをして、大だい学がくの病びょう院いんにはいっているんですが、そいつ
がすぐ来きてくれと言いうんです」といっさわわけけしきき。三四郎のほうはかえって驚おどろい
た。野々宮君の妹と、妹の病びょう気きと、大だい学がくの病びょう院いんをいっいっしょしょにままととめめて、それいけしゅういあ
た女おんなをくわわえて、それいちちをまわわにかかきまわわして、驚おどろいている。

「じゃ、よほどお悪わるいんですな」

「なにそうじゃないんでしょう。じつは母ははが看かん病びょうに行いってるんですが、——もし病びょう気きのため
なら、電でん車しゃへ乗のって駆かけて来きたほうはが早はやいわけですからね。——なに妹いもうとのいたずらでしょう。
ばかだから、よくこんなまねをします。ここへ越こしてからまだ一いっぺんも行いかないものだから、
きょうの日にち曜ようには来きると思おもって待まってでもいたのでしょう、それで」と言いって首くびを横よこに曲まげて
考かんががええた。

「しかしおいでになったほうがいいでしょう。もし悪いといけません」

「さよう。四、五日行かないうちにそう急に変わるわけもなさそうですが、まあ行ってみるか」

「おいでになるにしくはないでしょう」

野々宮は行くことにした。行くときめたについては、三四郎に頼みがあると言いだした。万一病気のための電報とすると、今夜は帰れない。すると留守が下女一人になる。下女が非常に臆病で、近所がことのほかぶっそうである。来合わせたのがちょうど幸いだから、あすの授業にさしつかえがなければ泊ってくれまいか、もっともただの電報ならばすぐ帰ってくる。まえからわかっていたれば、例の佐々木でも頼むはずだったが、今からではとても間に合わない。たった一晩のことではあるし、病院へ泊るか、泊らないか、まだわからないさきから、関係もない人に、迷惑をかけるのはわがまますぎて、しいてとは言いかねるが、——むろん野々宮はこう流暢には頼まなかったが、相手の三四郎が、そう流暢に頼まれる必要のない男だから、すぐ承知してしまった。

下女が御飯はというのを、「食わない」と言ったまま、三四郎に「失敬だが、君一人で、あとで食べてください」と夕飯まで置き去りにして、出ていった。行ったと思ったら暗い萩の間から大きな声を出して、

「ぼくの書斎にある本はなんでも読んでいいです。別におもしろいものもないが、何か御覧なさい。小説も少しはある」

と言ったまま消えてなくなった。椽側まで見送って三四郎が礼を述べた時は、三坪ほどな孟宗藪の竹が、まばらなだけに一本ずつまだ見えた。

まもなく三四郎は人畳敷の書斎のまん中で小さい膳を控えて、晩飯を食った。膳の上を見ると、主人の言葉にたがわず、かのひめいちがついている。久しぶりで故郷の香をかいたようであれしかったが、飯はそのわりにうまくなかった。お給仕に出た下女の顔を見ると、これも主人の言ったとおり、臆病にできた目鼻であった。

飯が済むと下女は台所へ下がる。三四郎は一人になる。一人になっておちつくとき、野々宮君の妹の事が急に心配になってきた。危篤なような気がする。野々宮君の駆けつけ方がおそ

いような気がする。そうして妹がこのあいだ見た女み おんなのような気がしてたまらない。三四郎はもう一ぺん、女の顔つきと目つきと、服装とを、あの時あのままに、繰り返して、それを病院の寝台の上に乗せて、そのそばに野々宮君を立たして、二、三の会話をさせたが、兄ではもの足らないので、いつのまにか、自分が代理になって、いろいろ親切に介抱していた。ところへ汽車がごうと鳴って孟宗藪のすぐ下を通った。根太のぐあいか、土質のせいか座敷が少し震えるようである。

三四郎は看病をやめて、座敷を見回した。いかさま古い建物と思われて、柱に寂がある。その代り唐紙の立てつけが悪い。天井はまっ黒だ。ランプばかりが当世に光っている。野々宮君のような新式の学者が、もの好きにこんな家を借りて、封建時代の孟宗藪を見て暮らすのと同格である。もの好きならば当人の随意だが、もし必要にせまられて、郊外にみずからを放逐したとすると、はなはだ気の毒である。聞くところによると、あれだけの学者で、月にたった五十五円しか、大学からもらっていないそうだ。だからやむをえず私立学校へ教えにゆくのだろう。それで妹に入院されてはたまるまい。大久保へ越したのも、あるいはそんな経済上のつごうかもしれない。……

宵の口ではあるが、場所が場所だけにしんとしている。庭の先で虫の音がする。ひとりですわっていると、さみしい秋の初めである。その時遠い所でだれか、

「ああああ、もう少しの間だ」

と言う声が出た。方角は家の裏手のようにも思えるが、遠いのでしっかりととはわからなかった。また方角を聞き分ける暇もないうちに済んでしまった。けれども三四郎の耳には明らかにこの一句が、すべてに捨てられた人の、すべてから返事を予期しない、真実の独白と聞こえた。三四郎は気味が悪くなった。ところへまた汽車が遠くから響いて来た。その音が次第に近づいて孟宗藪の下を通る時には、前の列車よりも倍も高い音を立てて過ぎ去った。座敷の微震がやむまでは茫然としていた三四郎は、石火のごとく、さっきの嘆声と今の列車の響きとを、一種の因果で結びつけた。そうして、ぎくんと飛び上がった。その因果は恐るべきものである。

三四郎はこの時じつと座に着いていることのきわめて困難^{こんなん}なのを発見^{はっけん}した。背筋^{せすじ}から足の裏^{あし うら}までが疑惧^{ぎぐ}の刺激^{しげき}でむずむずする。立^たって便所^{べんじょ}に行^いった。窓^{まど}から外^{そと}をのぞくと、一面^{いちめん}の星月夜^{ほしづきよ}で、土手下^{どて}の汽車道^{きしゃみち}は死^しんだように静^{しず}かである。それでも竹格子^{たけごうし}のあいだから鼻^{はな}を出^だすくらいにして、暗^{くら}い所^{ところ}をながめていた。

すると停車場^{ステーション}の方^{ほう}から提灯^{ちょうちん}をつけた男^{おとこ}がレールの上^{うへ}を伝^{つた}ってこっちへ来^こる。話し声^{はな こえ}で判^{はん}じると三^{さん}、四人^{よにん}らしい。提灯^{ちょうちん}の影^{かげ}は踏切^{ふみきり}から土手下^{どて}へ隠^{かく}れて、孟宗藪^{もうそう}の下^{した}を通^{とお}る時は、話し声^{はな こえ}だけになった。けれども、その言葉^{ことば}は手^てに取^とるように聞^きこえた。

「もう少し先^{さき}だ」

足音^{あしおと}は向^むこうへ遠^いのいて行^いく。三四郎^{さんしろう}は庭先^{にわさき}へ回^{まわ}って下駄^{げた}を突^つ掛^かけたまま孟宗藪^{もうそう}の所^{ところ}から、一間^{いっけん}余^{あまり}の土手^はを這^おい降り^りて、提灯^{ちょうちん}のあと^{あと}を追^おっかけて行^いった。

五^ご、六^{ろっけん}間^{かん}行^いくか行^いかないうちに、また一人^{ひとり}土手^どから飛^とび降り^りた者^{もの}がある。――

「轢^{れきし}死^しじゃないですか」

三四郎^{さんしろう}は何か答^{こた}えようとしたが、ちょっ^{こえ}と声^でが出^でなかつた。そのうち黒^{くろ}い男^{おとこ}は行^ゆき過^すぎた。これは野々宮^{ののみやくん}君^{おく}の奥^{おく}に住^すんでいる家^{いえ}の主^{あるじ}人^{ひと}だろうと、後^{あと}をつけなが^{かんが}ら考^{かんが}えた。半^{はん}町^{ちやう}ほどくると提灯^{ちょうちん}が留^{とど}まっている。人^{ひと}も留^{とど}まっている。人^{ひと}は灯^ひをかざしたま^{だま}ま黙^{だま}っている。三四郎^{さんしろう}は無^む言^{ごん}で灯^{した}の下^{した}を見^みた。下^{した}には死^{しがい}骸^{がい}が半^{はん}分^{ぶん}ある。汽^き車^{しゃ}は右^{みぎ}の肩^{かた}から乳^{ちち}の下^{した}を腰^{こし}の上^{うへ}までみごと引^ひきちぎ^ぎって、斜^{はすか}掛^かけの胴^{どう}を置^おき去^ぎりにして行^いったのである。顔^{かお}は無^む傷^{きず}である。若^{わか}い女^{おんな}だ。

三四郎^{さんしろう}はその時^{とき}の心^{こころ}持^もちをいまだに覚^{おぼ}えている。すぐ帰^{かえ}ろうとして、踵^{きびす}をめぐらしかけたが、足^{あし}がすくんでほとん^{うご}ど動^{どう}けなかつた。土手^{どて}を這^はい上^あがって、座敷^{ざしき}へもどつたら、動悸^{どうき}が打ち出^{うち}した。水^{みづ}をもらおうと思^{おも}って、下女^{げじよ}を呼^よぶと、下女^{げじよ}はさいわいになんにも知^しらないらしい。しばらくすると、奥^{おく}の家^{いえ}で、なん^{さわ}だか騒^{さわ}ぎ出^だした。三四郎^{さんしろう}は主^{しやう}人が帰^{かえ}ったんだなと覚^{さと}つた。やがて土手^{どて}の下^{した}ががやがやする。それが済^すむとまた静^{しず}かになる。ほとん^たど堪^{かた}え難^{がた}いほどの静^{しず}かさであった。

三四郎の目の前には、ありありとさっきの女の顔が見える。その顔と「ああああ……」と言った力のない声と、その二つの奥に潜んでおるべきはずの無残な運命とを、継ぎ合わせて考えてみると、人生という丈夫そうな命の根が、知らぬまに、ゆるんで、いつでも暗闇へ浮き出してゆきそうに思われる。三四郎は欲も得もいらぬほどこわかった。ただごとという一瞬間である。そのまえまではたしかに生きていたに違いない。

三四郎はこの時ふと汽車で水蜜桃をくれた男が、あぶないあぶない、気をつけないとあぶない、と言ったことを思い出した。あぶないあぶないと言いながら、あの男はいやにおちついてた。つまりあぶないあぶないと言いうるほどに、自分はあぶなくない地位に立ってれば、あんな男にもなれるだろう。世の中において、世の中を傍観している人はここに面白味があるかもしれない。どうもあの水蜜桃の食いぐあいから、青木堂で茶を飲んで煙草を吸い、煙草を吸っては茶を飲んで、じっと正面を見ていた様子は、まさにこの種の人物である。——批評家である。——三四郎は妙な意味に批評家という字を使ってみた。使ってみて自分でまいと感心した。のみならず自分も批評家として、未来に存在しようかとまで考えだした。あのすごい死顔を見るとこんな気も起こる。

三四郎は部屋の前にあるテーブルと、テーブルの前にある椅子と、椅子の横にある本箱と、その本箱の中に行儀よく並べてある洋書を見回して、この静かな書斎の主人は、あの批評家と同じく無事で幸福であると思った。——光線の圧力を研究するために、女を轢死させることはあるまい。主人の妹は病気である。けれども兄の作った病気ではない。みずからかかった病気である。などとそれからそれへと頭が移ってゆくうちに、十一時になった。中野行の電車はもう来ない。あるいは病気が悪いので帰らないのかしらと、また心配になる。ところへ野々宮から電報が来た。妹無事、あす朝帰るとあった。

安心して床にはいったが、三四郎の夢はすこぶる危険であった。——轢死を企てた女は、野々宮に関係のある女で、野々宮はそれと知って家へ帰って来ない。ただ三四郎を安心させるために電報だけ掛けた。妹無事とあるのは偽りで、今夜轢死のあった時刻に妹も死んでしまった。そうしてその妹はすなわち三四郎が池の端で会った女である。……

三四郎はあくる日例になく早く起きた。

寝つけない所に寝た床のあとをながめて、煙草を一本のんだが、ゆうべの事は、すべて夢のようである。椽側へ出て、低い廂の外にある空を仰ぐと、きょうはいい天気だ。世界が今ほが朗らかになったばかりの色をしている。飯を済まして茶を飲んで、椽側に椅子を持ち出して新聞を読んでいると、約束どおり野々宮君が帰って来た。

「昨夜、そこに轢死があったそうですね」と言う。停車場か何かで聞いたものらしい。三四郎は自分の経験を残らず話した。

「それは珍しい。めったに会えないことだ。ぼくも家におればよかった。死骸はもう片づけたろうな。行っても見られないだろうな」

「もうだめでしょう」と一口答えたが、野々宮君ののん気なものには驚いた。三四郎はこの無神経をまったく夜と昼の差別から起こるものと断定した。光線の圧力を試験する人の性癖が、こういう場合にも、同じ態度で表われてくるのだとはまるで気がつかなかった。年が若いからだろう。

三四郎は話を転じて、病人のことを尋ねた。野々宮君の返事によると、はたして自分の推測どおり病人に異状はなかった。ただ五、六日以来行ってやらなかったものだから、それを物足りなく思って、退屈紛れに兄を釣り寄せたのである。きょうは日曜だのに来てくれないのはひどいと言って怒っていたそうである。それで野々宮君は妹をばかだと言っている。本当にばかだと思っているらしい。この忙しいものに大切な時間を浪費させるのは愚だというのである。けれども三四郎にはその意味がほとんどわからなかった。わざわざ電報を掛けてまで会いたがる妹なら、日曜の一晚や二晩をつぶしたって惜しくはないはずである。そういう人に会って過ごす時間が、本当の時間で、穴倉で光線の試験をして暮らす月日はむしろ人生に遠い閑生涯というべきものである。自分が野々宮君であったならば、この妹のために勉強の妨害をされるのをかえってうれしく思うだろう。くらいに感じたが、その時は轢死の事を忘れていた。

野々宮君は昨夜よく寝られなかったものだからぼんやりしていけないと言いだした。きょうはさいわい昼から早稲田の学校へ行く日で、大学のほうは休みだから、それまで寝ようと言っている。「だいぶおそくまで起きていたんですか」と三四郎が聞くと、じつは偶然、

こうとうがっこう おそ せんせい ひろた みま
高等学校で教わったもとの先生の広田という人が妹の見舞いに来てくれて、みんなで話をし
ているうちに、電車でんしゃの時間おきに遅れて、つい泊とまることにした。広田の家へ泊るべきのを、また
妹がだだをこねて、ぜひ病院びょういんに泊れと言って聞かないから、やむをえず狭い所へ寝たら、
なんだか苦くるしくて寝つかれなかった。どうも妹は愚物だ。とまた妹を攻撃する。三四郎はお
かしくなった。少し妹のために弁護しようかと思つたが、なんだか言いにくいのでやめにし
た。

かわ ひろた こと き さんしろう なまえ さん し みみ
その代り広田さんの事を聞いた。三四郎は広田さんの名前をこれで三、四へん耳みみにしている。
そうして、水蜜桃すいみつとうの先生せんせいと青木堂あおきどうの先生せんせいに、ひそかに広田さんの名をつけている。それから
正門内せいもんないで意地いじの悪い馬わるに苦しめられて、喜多床きたどこの職人しよくにんに笑われたのもやはり広田先生にし
てある。ところが今承いまうけたまわってみると、馬けんの件けんははたして広田先生であった。それで水蜜桃も
かならかならどうせんせいどうせんせいちがちがききかんがかんがすこすこむりむり
必ず同先生に違ちがいと決きめた。考かんがえると、少すこし無理むりのようでもある。

かえ としき ごぜんちゆう とど い あわせ いちまいびょういん たの
帰る時に、ついでだから、午前中に届けてもらいたいと言って、裕あわせを一枚病院まで頼たのま
れた。三四郎はおお大いにうれしかった。

あたらし しかく ぼうし い
三四郎は新しい四角な帽子をかぶっている。この帽子をかぶって病院に行けるのがちょっと
得意である。さえざえしい顔をして野々宮君の家を出た。

おちゃ みず でんしゃ お くま の に あ しょさ いせい
御茶の水で電車を降りて、すぐ俵くまに乗った。いつもの三四郎に似合わぬ所作である。威勢よ
く赤門あかもんを引き込ませた時、法文科ほうぶんかのベルなが鳴り出した。いつもならノートとインキ壺つぼを持っ
て、八番はちばんの教室きょうしつにはいる時分である。一、二時間の講義じぶんぐらい聞きいちそくにじかんなこうぎき
という気きで、まっすぐに青山内科あおやまないかの玄関げんかんまで乗りつけた。

あ ぐち おく ふた め かど みぎ き つきあ ひだり ま ひがしがわ へや おそ
上がり口を奥へ、二つ目の角を右へ切れて、突当たりを左へ曲がると東側の部屋だと教わ
ったとおあるり歩いて行くと、はたしてあつた。黒塗りの札くろぬに野々宮よよし子ふだと仮名こで書いて、戸口かな
に掛かけてある。三四郎はこの名前よを読よんだまま、しばらく戸口の所ところでたたずんでいた。いなか
物ものだからノックするなぞという気きの利きいた事ことはやらない。「この中なかにいる人ひとが、野々宮君の
妹いもうとで、よし子おんなという女である」

「小川さんですか」と向こうから尋ねてくれた。顔は野々宮君に似ている。娘にも似ている。しかしただ似ているというだけである。頼まれた風呂敷包みを出すと、受け取って、礼の述べて、

「どうぞ」と言いながら椅子をすすめたまま、自分は寝台の向こう側へ回った。

寝台の上に敷いた蒲団を見るとまっ白である。上へ掛けるものもまっ白である。それを半分ほど斜にはぐって、裾のほうが高く見えるところを、よけるように、女は窓を背にして腰をかけた。足は床に届かない。手に編針を持っている。毛糸のたまが寝台の下に転がった。女の手から長い赤い糸が筋を引いている。三四郎は寝台の下から、毛糸のたまを取り出してやろうかと思った、けれども、女が毛糸にはまるで無頓着でいるので控えた。

おっかさんが向こう側から、しきりに昨夜の礼を述べる。お忙しいところをなどと言う。三四郎は、いいえ、どうせ遊んでいますからと言う。二人が話をしているあいだ、よし子は黙っていた。二人の話が切れた時、突然、

「ゆうべの轢死を御覧になって」と聞いた。見ると部屋のすみに新聞がある。三四郎が、「ええ」と言う。

「こわかったでしょう」と言いながら、少し首を横に曲げて、三四郎を見た。兄に似て首の長い女である。三四郎はこわいともこわくないとも答えずに、女の首の曲がりぐあいをながめていた。半分は質問があまり単純なので、答に窮したのである。半分は答えるのを忘れたのである。女は気がついたとみえて、すぐ首をまっすぐにした。そうして青白い頬の奥を少し赤くした。三四郎はもう帰るべき時間だと考えた。

挨拶をして、部屋を出て、玄関正面へ来て、向こうを見ると、長い廊下のはずれが四角に切れて、ぱっと明るく、表の緑が映る上がり口に、池の女が立っている。はっと驚いた三四郎の足は、さっそく歩調に狂いがあった。その時透明な空気の画布の中に暗く描かれた女の影は一足前へ動いた。三四郎も誘われたように前へ動いた。二人は一筋道の廊下のどこかですれ違わねばならぬ運命をもって互いに近づいて来た。すると女が振り返った。明るい表の空気の中には、初秋の緑が浮いているばかりである。振り返った女の目に応じて、四角

の中に、^{あら}現われたものもなければ、これを^ま待ち^う受けていたものもない。三四郎はそのあいだに女の^{しせい}姿勢と^{ふくそう}服装を^{あたま}頭の中へ入れた。

^{きもの}着物の色はなんと^{いろ}いう名^なかわからない。大学の^{だいがく}池の水へ、^{いけ}曇った^{みず}常磐木の影が映る時のようである。それはあざやかな^{しま}縞が、^{うへ}上から^{した}下へ^{つらぬ}貫いている。そうしてその縞が貫きながら^{なみ}波を^う打って、互いに^よ寄ったり^{はな}離れたり、^{かさ}重なって^{ふと}太くなったり、^わ割れて^{ふたすじ}二筋になったりする。^{ふきそく}不規則だけれども^{みだ}乱れない。上から^{さんぶいち}三分一のところを、^{ひろ}広い^{おび}帯で^{よこ}横に^{しき}仕切った。帯の^{かん}感じには^{あたた}暖^きかみがある。黄^きを含んで^{ふく}いるためだろう。

うしろを振り向いた時、^{みぎ}右の^{かた}肩が、^ひあとへ^{ひだり}引けて、^て左の手が^{こし}腰に^そ添った^{まえ}まま^で前へ出た。ハンケチを^も持っている。そのハンケチの^{ゆび}指に^{あま}余ったところが、^{ひら}さらりと^{きぬ}開いている。絹のためだろう。――腰から下は^{ただ}正しい^{ただ}姿勢にある。

女はやがてもとのとおりに^む向き^{なお}直った。目を^め伏せて^{ふたあし}二足ばかり^{とつぜんくび}三四郎に近づいた時、突然^{すこ}首を^{おとこ}少しうしろに^み引いて、^{ふたえまぶた}まともに^{きれなが}男を見た。二重^{かっこう}瞼の^め切長の^めおちついた^だ恰好である。目立って^{くろ}黒い^{まゆげ}眉毛の下に^い生きて^{どうじ}いる。同時に^はきれいな^{かおいろ}歯が^{かおいろ}あらわれた。この歯とこの顔色とは三四郎にとって^{わすれ}忘る^{たいしょう}べからざる^{たいしょう}対照であった。

きょうは^{しろ}白いものを^{うす}薄く^ぬ塗っている。けれども^{ほんらい}本来の^じ地を^{かく}隠すほどに^{むしゅみ}無趣味ではなかつた。こまやかな^{にく}肉が、^{いろ}ほどよく^{つよ}色づいて、^ひ強い日光に^みめげない^{うえ}ように見える上を、^こきわめて^こ薄く^こ粉が^ふ吹いている。てらてら^{ひか}照る^{かお}顔ではない。

肉は^{ほお}頬といわず^{あご}顎といわず^しきちりと^{ほね}締まっている。骨の上に^{あま}余ったものは^{おも}たんとなく^{おも}くらいである。それでいて、^{ぜんたい}顔全体が^{やわら}柔かい。肉が柔かいのではない^{おも}骨そのものが柔かいように思われる。奥行き^{おくゆ}の^{なが}長い^{かん}感じを^お起こさせる顔である。

女は^{おんな}腰を^{こし}かがめた。三四郎は^{さんしろう}知らぬ^し人に^{ひと}礼を^{れい}されて^{おどろ}驚いたというよりも、^{おどろ}むしろ^{おどろ}礼のしかたの^{たく}巧みなのに^{おどろ}驚いた。腰から^{かぜ}上が、^の風に乗る^{かみ}紙のように^{まえ}ふわりと^お前に^{はや}落ちた。しかも^{はや}早い。それで、^{かくど}ある^き角度まで^く来て^{なら}苦もなく^{おぼ}はっきりと^{おぼ}とまった。むしろ^{なら}習って^{おぼ}覚えたものではない。

「ちょっと伺^{うかが}いますが……」と言う声^いが白^{こえ}い歯^{しろ}のあいだから出^はた。きりりとしている。しかし鷹揚^{おうよう}である。ただ夏^{なつ}のさかりに椎^{しい}の実^みがなっているかと人^{ひと}に聞き^きそうには思われなかつた。三四郎^{こと}はそんな事^きに氣^きのつく余裕^{よゆう}はない。

「はあ」と言^たって立ち止^どまった。

「十五号^{じゅうごうしつ}室^{へん}はどの辺^{へん}になりましよう」

十五号^{いまで}は三四郎^きが今^{へや}出^きて来^きた部屋^{へや}である。

「野々宮^{ののみや}さんの部屋^{へや}ですか」

今度^{こんど}は女^{おんな}のほう^{ほう}が「はあ」と言^いう。

「野々宮^{ののみや}さんの部屋^{へや}はね、その角^{かど}を曲^まがって突^つき当^{あた}って、また左^{ひだり}へ曲^まがって、二番目^{にばんめ}の右側^{みぎがわ}です」

「その角^{かど}を……」と言^いいながら女^{おんな}は細^{ほそ}い指^{ゆび}を前^{まへ}へ出^いした。

「ええ、ついその先^{さき}の角^{かど}です」

「どうもありがとう」

女^{おんな}は行^いき過^すぎた。三四郎^{さんしろう}は立^たったま^ま、女^{おんな}の後^{うしろ}姿^{すがた}を見守^{みまも}っている。女^{おんな}は角^{かど}へ来^きた。曲^まがるうとするとたんに振^ふり返^{かえ}った。三四郎^{さんしろう}は赤^{せきめん}面^{めん}するばかりに狼^{ろう}狽^{ばい}した。女^{おんな}はにこりと笑^{わら}って、この角^{かど}ですかというよ^ようなあいずを顔^{かお}でし^した。三四郎^{さんしろう}は思^{おも}わずうなずいた。女^{おんな}の影^{かげ}は右^{みぎ}へ切^きれて白^{しろ}い壁^{かべ}の中^{なか}へ隠^{かく}れた。

三四郎^{さんしろう}はぶらりと玄^{げん}関^{かん}を出^でた。医^い科^か大^{だい}学^{がく}生^{せい}と間^ま違^{ちが}えて部^へ屋^やの番^{ばん}号^{ごう}を聞^きいたのかしらんと思^おつて、五^ご、六^ろ歩^ぽあるいたが、急^{きゅう}に氣^きがついた。女^{おんな}に十五号^{じゅうごう}を聞^きかれた時^{とき}、もう一^{いっ}ぺんよし子^この部^{へや}へあともどりをして、案^{あん}内^{ない}すればよかつた。残^{ざん}念^{ねん}なことをし^した。

三四郎^{さんしろう}はいまさらとて帰^{かえ}す勇^{ゆう}氣^きは出^でなかつた。やむをえ^えずまた五^ご、六^ろ歩^ぽあるいたが、今度^{こんど}はぴたりととま^とまった。三四郎^{さんしろう}の頭^{あたま}の中^{なか}に、女^{おんな}の結^{むす}んでいたリボ^{りぼ}ンの色^{いろ}が映^{うつ}った。そのリボ^{りぼ}ンの

色も質も、たしかに野々宮君が兼安で買ったものと同じであると考^{かんが}え出した時、三四郎は急に足が重^{あし おも}くなった。図書館の横^{としょかん よこ}をのたくるように正門の方^{せいもん ほう}へ出ると、どこから来^きたか^{よじろう}与次郎が突^{とつぜん}然^{こえ}声をかけた。

「おいな^{やす}ぜ休^{じん}んだ。きょうはイタリ一人^{じん}がマカロニーをいかにして食^くうかという講義^{こうぎ}を聞いた」と言いながら、そばへ寄^よって来^きて三四郎の肩^{かた}をたたいた。

ふたり^{ふたり}すこ^{すこ}ある^{ある}二人は少^{すこ}しいっしょに歩いた。正門のそばへ来^きた時、三四郎は、

「君^{きみ}、今^{いま}ごろでも薄^{うす}いリボン^{リボン}をかけるものかな。あれは極^{ごく}暑^{しょ}に限^{かぎ}るんじゃないか」と聞いた。与次郎はアハハハと笑^{わら}って、

「〇〇教^ま授^まに聞^きくが^いいい。なんでも知^しってる男^{おとこ}だから」と言^いって取^とり合^あわな^なかった。

正門の所^{ところ}で三四郎はぐあいが悪^{わる}いからきょうは学^が校^{っこう}を休^いむと^だ言^いい出^だした。与次郎はいっしょについて来^きて損^{そん}をしたといわぬばかりに教^{きょう}室^{しつ}の方^{かえ}へ帰^いって行^いった。